

聖書:ダニエル書5章17～31節

説教:天の主に向かって高ぶる者

はじめに

南王国ユダがバビロン王であるネブカドネツアルによって包囲されて、ダニエルが補囚の身となってバビロンに連れて行かれたのはBC605年のことでした。それから66年の月日が経ちます。ベルシャツアルがバビロンの支配者であったときに起きた出来事がこの5章に書かれています。ネブカドネツアルとベルシャツアルは、聖書では互いに父と子の関係で現していますが、実際は祖父と孫の関係であることがわかっています。聖書の父と子は、家族や血のつながりをあらかず場合もあるのでこうなっています。ここでは聖書の従い父と子ということばを使います。

ベルシャツアルはあるとき千人の貴族を招き、ネブカドネツアルがエルサレム神殿から持ち帰った金の杯でお客様に酒を振る舞います。人々が喜んで杯を飲み、異教の神々を賛美していたとき、突然人の手の指が現れて壁に何か文字を書きはじめます。それを見たベルシャツアルは驚いてブルブル震え出します。書かれた文字の意味を知りたくて学者たちを呼んでも、だれも解き明かすことができません。途方に暮れていたときに、ベルシャツアルの母がダニエルのことを思い出し、それでダニエルを呼ぶことにした。その続きが今日の所です。ダニエルは壁に書かれた文字の意味を解き明かします。けれどもベルシャツアルはその夜に殺されてしまう。その理由について、前回はエルサレム神殿に置かれていた金の器に注目し、キリストが飲むべき杯を横取りして、自分の力を誇るために使っただけでなく、異教の神々を賛美するために使ったためであった。そのようなことを見てきました。今日はまた別の面から考えます。

## 1 父ネブカドネツアル

### 1) 心が高ぶった

これまでダニエル書を読んできて、似たような話しが何度か繰り返されていることにお気づきの方もいらっしゃるでしょう。5章では、ベルシャツアルが壁に書かれた文字の意味を知ろうとして学者たちを呼び、それができないとわかるとダニエルが呼ばれる。2章と4章では、ネブカドネツアルが夢に現れた幻の意味を知りたくて学者たちを呼び、それができないとわかるとダニエルが呼ばれた。話の筋がよく似ている。ところがこの二人の結末が

まったく反対なのです。ネブカドネツアルは天と地を造られた神を信じる者となります。でもベルシャツアルは殺されてしまう。どうしてこんな違いが生じるのか。だれもが疑問に思うはずですが。

ダニエルは、まさにその所に焦点を当てながら解き明かしていきます。まずネブカドネツアルはどうだったか。19節。「神が父上にお与えになった偉大さによって、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはことごとく、父上の前に震えおののきました。彼は思いのままに人を殺し、思いのままに人を生かし、思いのままに人を高め、思いのままに人を低くしました。」

ネブカドネツアルがどんな人であったのか。例えばエレミヤ書39章を開くとよくわかる。ネブカドネツアルが、エルサレムを包囲してユダの王であったゼデキヤを捕まえたとき、ゼデキヤの目の前で息子たちを虐殺し、ゼデキヤの目をつぶし、足かせをはめさせてバビロンに連れて行き、エルサレムの町には火を放って焼いてしまう。なんとも残酷な話ですが、そういうふうにして彼はバビロン帝国の王座に上り詰めるわけです。

### 2) 引きずり降ろされた

ところがこのように繁栄を極めていたときに異変が起きました。20節。「こうして彼は、心が高ぶり、霊が頑なになり、高慢にふるまったので、その王座から引きずり降ろされ、栄光を取り上げられました。」

王が宮殿の屋上から町を見おろして、「これは私の手で立てたものだ」と言った瞬間でした。突然、彼は人間の心を失って尋常ではないふるまいをするようになり、牛のように草を食べてきた家畜同然の姿になってしまう。当然、王としての務めを果たすことなどできません。王座から転がり落ちてしまいます。

### 3) 知るようになった

それから数ヶ月か数年なのかはわかりませんが時間が経ってから、あるとき彼は我に返って一つの真理に気がつく。21節の後半です。「ついにこう知るようになりました。いと高き神が人間の国を支配し、みこころにかなう者をその上にお立てになるのだと。」

ネブカドネツアルが自分で気がついたのではありません。実は獣の姿になる一年前に見た夢の中で

すでに言われていたのです。4章17節後半。「これは、いと高き方が人間の国を支配し、これを見こころにかなう者に与え、また人間の中の最も低い者をその上に立てることを、いのちある者たちが知るためである。」

そのときは何のことかピンとこなかった。でも自分が獣の姿にまで落とされて、低くされて初めてわかった。天にはいと高き方がおられる。その許しがなければ誰も王座につくことはできない。そうして、彼はいと高き神がなさるみわざはことごとく真実であると全世界に証しする者となります。これがネブカドネツアルに起きたことでした。

## 2 子であるベルシャツアル

### 1) すべて知っていながら

それに比べてベルシャツアルはどうなのか。22, 23節。「その子であるベルシャツアル王よ、あなたはこれらのことをすべて知っていながら、心を低くしませんでした。それどころか、天の主に向かって高ぶり、その宮の器を自分の前に持って来させ、あなたと貴族たちとあなたの側室や侍女たちは、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しました。しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」

ネブカドネツアルはダニエルに出会うまでは、天のいと高き神は知りませんでした。でも自分の見た夢の意味についてダニエルに解き明かしてもらいながら、本当の神を知るようになります。

対してベルシャツアルはどうか。「あなたはこれらすべてのことをすべて知っていた。」ダニエルはこう指摘しています。なぜ知っていたとわかるか。4章1, 2節にこうあるからです。「ネブカドネツアル王から、全地に住むすべての民族、国民、言語の者たちへ。あなたがたに平安が豊かにあるように。いと高き神が私に行われたしるしと奇跡を知らせることは、私の喜びとするところである。」

このように述べてから、父ネブカドネツアルは自分がどのようにして信仰者になったのかを証していく。これほどのことを全国民に大々的に告げたわけですから、これを家訓として孫子の代に至るまでしっかり語り聞かせなさいと当然言ったでしょう。それでベルシャツアルは聞いて知っていたはずなのです。おそらく、エルサレム神殿におさめられていた金の器についても、それを決して軽々しく扱うべきではないと注意を受けていたでしょう。

### 2) 天の主に向かって高ぶった

ところが彼はそんなことはいっさい無視して、ただ自分の権力を誇るためにその器で酒を飲みながらほかの神々を賛美しました。ベルシャツアルにも言い分があったでしょう。「敵の国から略奪してきた戦利品をどのように扱おうともこちらの勝手ではないか。他の国でもやっていることだ。」けれども、エルサレム神殿にあった器については、そのような言い訳はできない。それで23節後半で言われる。「しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」

私たちは生まれたときから今までずっと寝ている間も息をしてきました。呼吸のメカニズムについては、医学的に説明はできるでしょう。でも、なぜひとときも欠かさずに息ができていいのか、考えてみれば不思議です。聖書の答えは明快です。天におられる方が私たちの息をするのも止められるのもすべて手に握っておられる。問題は、それを認めるのか認めないのか、なのです。これを認めようとしなかったベルシャツアルは、人の息を止めて殺すことも思いのままであると考え、その高慢さによって、彼は命を絶たれてしまいます。

## 3 いと高き神

### 1) 高慢になってはいけないと願っても

このことから私たちはなにを教えられるのでしょうか。何事も高慢になってはいけないということでしょうか。でも、そんなこといまさら言われなくても知っています。それが実践できないので困っている。それが本音です。私など人に言えたものではありません。心を探っていくなら、いつも高慢の種があって、すぎあらばそれが口からことばとなり態度となります。わかっているともそうなる。どうして難しいのか。答えは簡単です。アダムとエバが神にそむいた自分たちが神になりたかったからです。高慢の罪はそこからきている。それほど根深いものですから、努力で止められるようなものではありません。

### 2) 人間の中の最も低い者をその上に立てる

でも開き直ってばかりもいられない。いったいどうしたらよいのでしょうか。ネブカドネツアルを見ましょう。彼は世界で最も高慢な王であったと言つてよい。そんな彼が神に出会ったときなんと語ったか。4章3節。「そのしるしのなんと偉大なことよ。その奇跡のなんと力強いことよ。その国

は永遠にわたる国、その主権は代々限りなく続く。」

「その国」とはどの国なのでしょう。バビロンでしょうか。違います。人が立てた国はいつか滅びます。彼が言っているのは永遠にわたる国です。これは神の国のことでしかあり得ません。その神の国に立てられる王は誰なのか。繰り返しになりますが、4章17節後半。「これは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最も低い者をその上に立てることを、いのちある者たちが知るためである。」

人間の中の最も低くされた者が神の国の王として立てられる。私たちはそれがイエス・キリストであることをしています。イエスは、この世で最も低くされた者となるために、自ら十字架におつきなります。その十字架を見るとき、私たちははつきり認めることになる。この方こそ神の国の王となる資格のある方である。そう口で告白しながら、私たちはすぐに高慢になります。そんなとき思い出しましょう。私たちが息のするものも止めるのも、誰の手にあるのか。いと高き神の手にある。その方が、私たちのためにこの世で最も低くなられた。そのことを思い起こします。高慢になっている私たちの前で、神が貧しい姿となって低くなられる。その十字架の姿を見たなら、私たちはどうなるでしょう。いつまでも高ぶってられない。恥ずかしくなる。そうして主の前で自分の罪を言い表すようになっていく。それが私たちに備えられた唯一の救いの道である。その恵みを覚えたいと願います。